

底に、火照つた頬のかげりの裡にひそむのは、崩れ行く生活の邑愁か。
妖しい焰の幻想が、夜空一杯に擴がらうとする時、心臓の上には不吉な灰色の翼が重い。

秋

身を緊める秋の大氣は流行はやりのチヨツキ

つまらぬ感傷はかなぐり捨てよ

空高く身を投げ放さう

おびたゞしい光粒の中に湛へられた

生の誘惑

底知れぬ紺碧の蒼穹よ